

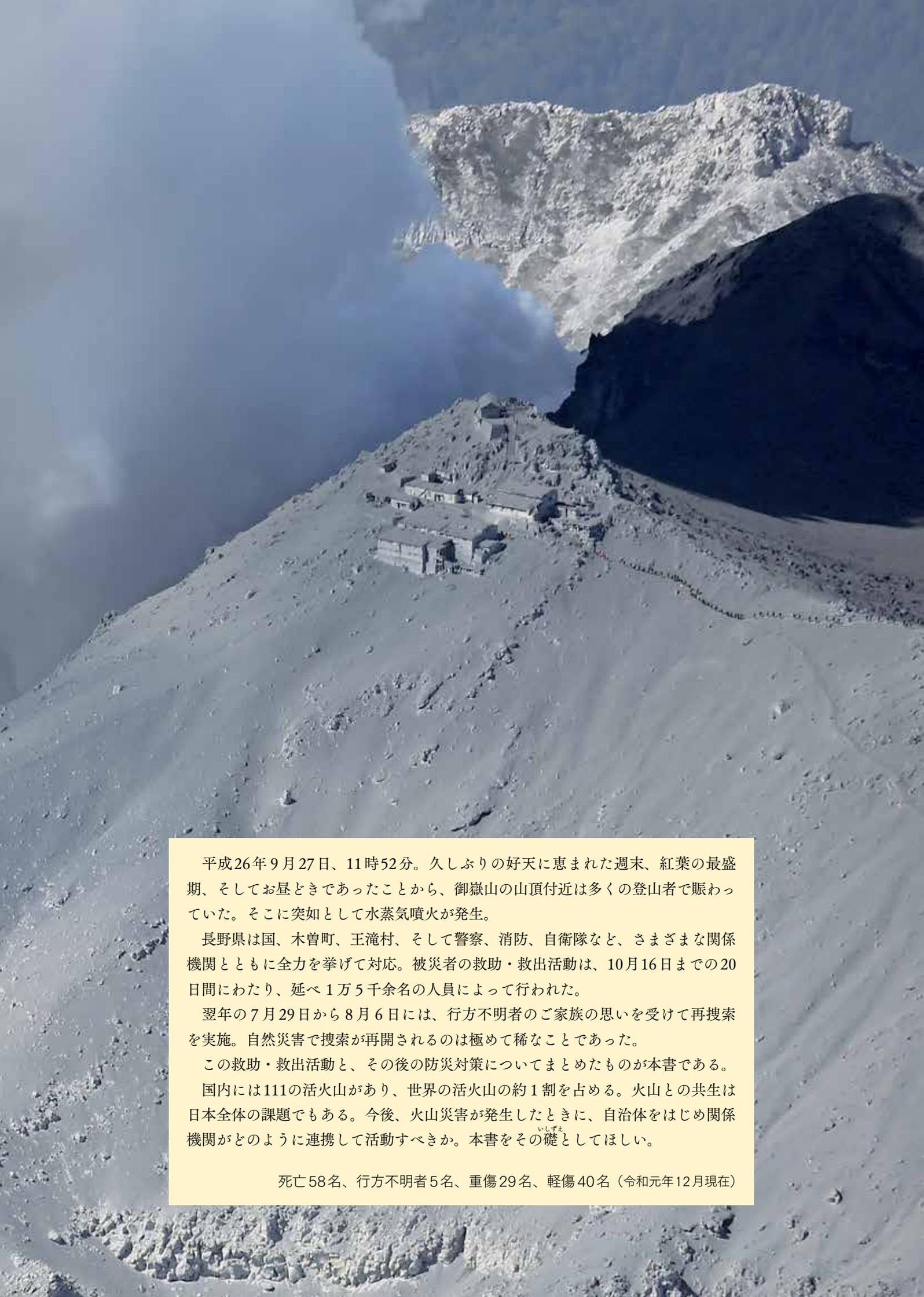
長野県 御嶽山噴火災害対応記録集



長野県 御嶽山噴火災害 対応記録集







平成26年9月27日、11時52分。久しぶりの好天に恵まれた週末、紅葉の最盛期、そしてお昼どきであったことから、御嶽山の山頂付近は多くの登山者で賑わっていた。そこに突如として水蒸気噴火が発生。

長野県は国、木曾町、王滝村、そして警察、消防、自衛隊など、さまざまな関係機関とともに全力を挙げて対応。被災者の救助・救出活動は、10月16日までの20日間にわたり、延べ1万5千余名の人員によって行われた。

翌年の7月29日から8月6日には、行方不明者のご家族の思いを受けて再捜索を実施。自然災害で捜索が再開されるのは極めて稀なことであった。

この救助・救出活動と、その後の防災対策についてまとめたものが本書である。

国内には111の活火山があり、世界の活火山の約1割を占める。火山との共生は日本全体の課題でもある。今後、火山災害が発生したときに、自治体をはじめ関係機関がどのように連携して活動すべきか。本書をその礎としてほしい。

死亡58名、行方不明者5名、重傷29名、軽傷40名（令和元年12月現在）

この教訓を火山防災対策向上に生かすために

長野県知事 阿部 守一

平成26年（2014年）9月27日に発生した御嶽山噴火から5年の月日が経ちました。

この噴火災害では、58名もの尊い命が失われ、今なお5名の方の行方がわかっておりません。犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、最愛のご家族、ご親戚、あるいはご友人を失い、今もなお深い悲しみの中で日々をお過ごしの皆様にご謹んでお悔やみを申し上げます。また、噴石などで負傷された方々など被災されたすべての皆様にご心よりお見舞いを申し上げます。

現在、御嶽山は、噴火警戒レベル1で静穏化の傾向が続いておりますが、いまだに注意が必要な火口もあり、噴火前の状態には戻っておりません。

防災以降、長野県は、二度と噴火災害による犠牲者を出すまいという強い決意のもと、木曾町、王滝村、名古屋大学などと連携して、御嶽山の火山防災対策に取り組んでまいりました。万が一の噴火の際に登山者が安全に避難できるよう、地域が一体となって、避難シェルターの設置や山小屋の機能強化、登山道の整備などの安全対策を進め、安全対策が整った登山道から順次立入規制の解除及び緩和を行い、再び、多くの皆様が御嶽山の頂に立てるようになりました。

また、噴火災害の教訓を、世代を超えて伝承するため、県では「御嶽山火山マイスター」制度を創設し、現在認定を受けた10名以上のマイスターが、火山防災啓発や地域の魅力発信に取り組んでおります。

さらに、名古屋大学には、木曾町三岳支所に「名古屋大学御嶽山火山研究施設」を開設いただき、火山活動の観測や火山防災教育など、地域の防災力向上にご協力いただいております。

さて、この度の災害に際しては、警察、消防、自衛隊など延べ2万人を超える方々に、噴火直後と翌年の2回にわたり、噴煙が立ち上る危険な火口付近や火山灰が泥濘化した現場において、あるいは不安定な天候の中で、懸命に被災者や行方不明者の救助・捜索活動を行っていただきました。多くの皆様のご尽力に改めて深く感謝申し上げます。

この記録集は、本県の今後の火山防災の教訓とするために、御嶽山噴火災害に携わった多くの関係機関の活動を取りまとめたものです。火山防災に関わる全国の自治体や防災関係機関などにおいても広くご活用いただくことにより、この噴火災害の経験やそこから得られた教訓が、各地の火山防災対策向上の一助となることを願っております。

木曾地域は、現在もなお復興の途上にあります。長野県といたしましては、今後とも御嶽山噴火災害の記憶を胸に深く刻み、安全対策に万全を期すとともに、たくさんの皆様に訪れていただける魅力ある地域づくりを支援してまいります。復興に向けた引き続きのご理解、ご協力をお願い申し上げます、刊行にあたってのあいさつといたします。

教訓を風化させないために

木曾町長 原久仁男

古来より山岳信仰の聖地として篤い信仰を集めてきた御嶽山は、近代に入ってから登山や観光といったレジャーの山としても知られるようになり、麓に暮らす私たちに豊かな水と土壌を与えるばかりでなく、山を訪れる多くの人々との交流をもたらしてくれました。

ところが、平成26年9月27日——よく晴れた紅葉最盛期の休日、御嶽山は突然として水蒸気噴火を起こし、火口付近に居あわせた登山者の方々がその尊い命を落とされました。身近な「御山」がこんな形で大災害をもたらしたことに大きな驚きと、無念さと、そして木曾や御嶽山を愛していただいた方々が犠牲となられたことに、胸が張り裂ける思いでありました。

改めて犠牲となられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げ、ご家族、関係者の皆様に衷心よりお悔やみ申し上げます。

さて、木曾町では、国や長野県をはじめ隣接自治体や研究機関など各方面からのご協力をいただきながら、いまなお復旧・復興の道なかばを進んでいる最中です。荒廃した登山道の整備、被災した山小屋の解体、避難壕と二ノ池山荘の建設、パトロール隊の配備、火山研究施設への支援など、一つひとつの対策を重ねた成果が実り、噴火から4年が経過した平成30年9月には、頂上に至る黒沢口登山道の一部規制緩和に漕ぎつけることができました。

また、噴火災害の教訓を風化させないよう資料整理にも着手し、防災体制の充実を図っていくための一過程として『平成26年 御嶽山噴火災害活動記録誌』を平成30年3月に刊行しました。同書では、地元木曾町の人々がとった対応の経過や具体的な活動内容を、関係諸機関の動きにも触れながら取りまとめ、復興に向けたいくつかの事業の進捗状況についてもあわせて報告しています。

しかしながら、過酷を極めたであろう山頂付近での救助・捜索活動の様子や他機関の対応状況については把握しきれていない部分も多く、情報共有することを許されたデータを記録するに留まっていました。

このたび長野県において刊行される災害対応記録集は、この災害に関わった行政、救助機関、火山専門家、民間など多角的な視点を取り入れたものとなっており、詳細な資料とあいまって、これまで一般に知られていなかった側面にも光を当てうるものであると拝察します。

刊行に至るまでは、綿密な取材や調査、細部にわたる確認など、困難な作業を伴ったことと思います。編集に関わられた各位のご労苦に敬意を表しつつ、本記録集が火山防災の基礎的資料として広く活用されることを期待申し上げ、刊行にあたっての言葉とさせていただきます。

それぞれの思いを繋ぐ重責

王滝村長 瀬戸 普

霊峰木曾御嶽。昭和54年（1979年）の小規模噴火では犠牲者はなかったものの、昭和59年（1984年）、長野県西部地震により山体が崩落。土石流により下流の濁沢川、王滝川流域で15名の犠牲者が出ました。大自然がもたらす災害の前に、人間の力は無力であることを痛感させられました。それでも私たちはこの山と共に生き、共に暮らしてきました。

平成26年。この夏は天候不順が続き、御嶽山もいつもの夏と比べると登山者が少なく、静かな夏山でした。9月中頃から天候が安定、そして、その日を迎えることとなりました。9月27日。この日は天候も良く、紅葉で色づく御嶽山には多くの登山を楽しむ人が訪れていました。お昼前の午前11時52分、突如として御嶽山が噴火。山頂付近でそれぞれのひと時を過ごしていた方々が尊い命を失い、心や体に傷を負うこととなりました。懸命な捜索活動が行われましたが、未だに5人の方々が家へ帰ることができないままとなっています。

私たちは御嶽山から多くの恩恵を受けてきました。その御嶽山で戦後最大となる噴火災害が発生しました。犠牲になられた方々には、お一人お一人に、愛する家族があり、親しい友人があり、かけがえのない人生がありました。こころざし半ばで人生を奪われた無念さを思いますと、今になっても心が引き裂かれる思いです。

どんなに歳月がながれようとも、最愛のご家族を突然失われたご遺族の悲しみは、癒えることはありません。改めてお悔やみを申し上げます。

発災後、御嶽山一帯は火山観測機器の増設がされ、今や国内有数の噴火活動監視体制が整った火山になりつつあります。この体制をしっかりと活用し、安全確保に繋げていかなければなりません。私たちは、このような悲しみを再び繰り返すことのないために、あの日、あの時の多くの方々の、それぞれの思いを風化させることなく次世代に繋ぐ重責を負っています。そのため、村独自の火山防災対策についても、ハード面、ソフト面の両面で、でき得る限りの策を講じていく所存です。

この記録集は、御嶽山噴火災害に関わった、行政、救助機関、火山専門家など様々な立場からの視点で、発災直後からの記録を整理し、今後の御嶽山火山防災に活かすために刊行されるものと思っています。近年、全国各地で震災や、豪雨災害が多く発生しており、この記録集の刊行が防災に携わる方々にとって、多少でも参考となれば幸いです。

結びに、発災直後からご協力をいただいた多くの方々、物心両面からご支援をいただきました多くの方々へ感謝を申し上げますとともに、この災害により犠牲になられた方々の御霊が、とこしえに安らかならんことをお祈り申し上げ、記録集刊行にあたっての言葉とします。

長野県御嶽山噴火災害対応記録集・目次

[第1章] 御嶽山20日間の記録

時系列で振り返る御嶽山噴火	14
資料 機関別活動人員一覧	64
対比写真で見る噴火前と噴火後	66

[第2章] 救助・救出活動と行政等の対応

救助・救出活動の概要	70
長野県災害対策本部の対応	80
警察の対応	84
消防の対応	92
自衛隊の対応	100
内閣府の対応	108
気象庁の対応	110
木曾町の対応	112
王滝村の対応	116
DMATの対応	119
山小屋の対応	123
御岳ロープウェイの対応	127

[第3章] 再捜索現場からの報告

再捜索に至るまで	130
第1回合同調査	132
第2回合同調査	133
先遣隊派遣	134
シェルター設置	135
再捜索活動	136
捜索終了	142
資料 再捜索活動人員等	144
資料 再捜索実施経過一覧	145

阿部守一長野県知事インタビュー

正確な記録を残して未来の災害対策に	148
-------------------	-----

原久仁男木曾町長インタビュー

安心して登っていただける山になるように	150
---------------------	-----

瀬戸普王滝村長インタビュー

正しく知って、正しく恐れる	151
---------------	-----

[第4章] 御嶽山噴火概要

御嶽山・噴火の実態	名古屋大学大学院環境学研究科教授 山岡耕春 産業技術総合研究所主任研究員 及川輝樹
噴火の歴史	154
2007年噴火	158
2014年噴火の推移	160
地球物理学的見地からみた2014年噴火	169
今後について	173

[第5章] 噴火を契機とした御嶽山の火山防災対策

御嶽山噴火後の日本の火山防災対策	176
監視・観測体制の強化	178
噴火警戒レベル	180
長野県が推進中の火山防災対策	182
火山防災協議会の役割	186
名古屋大学御嶽山火山研究施設	191

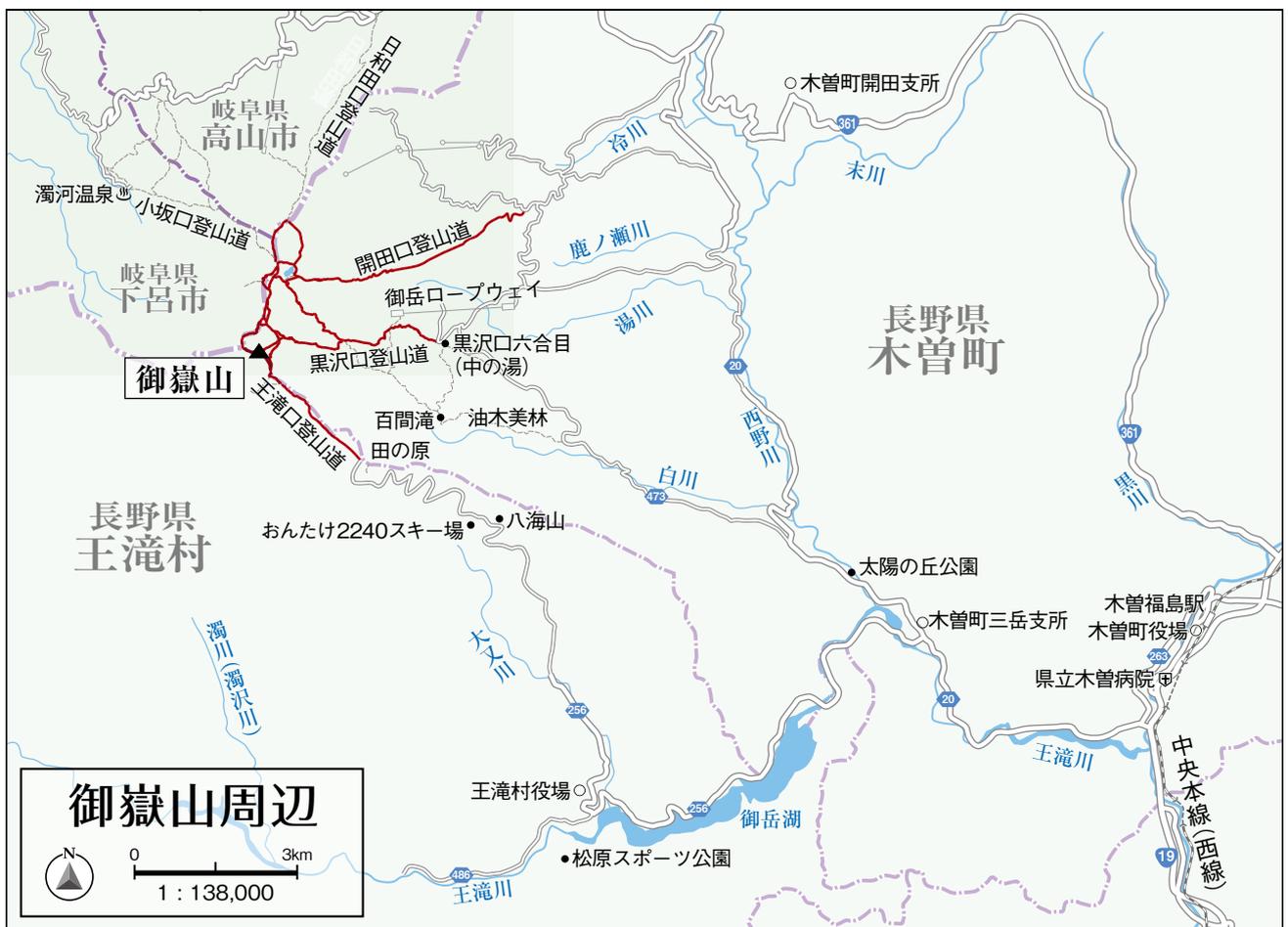
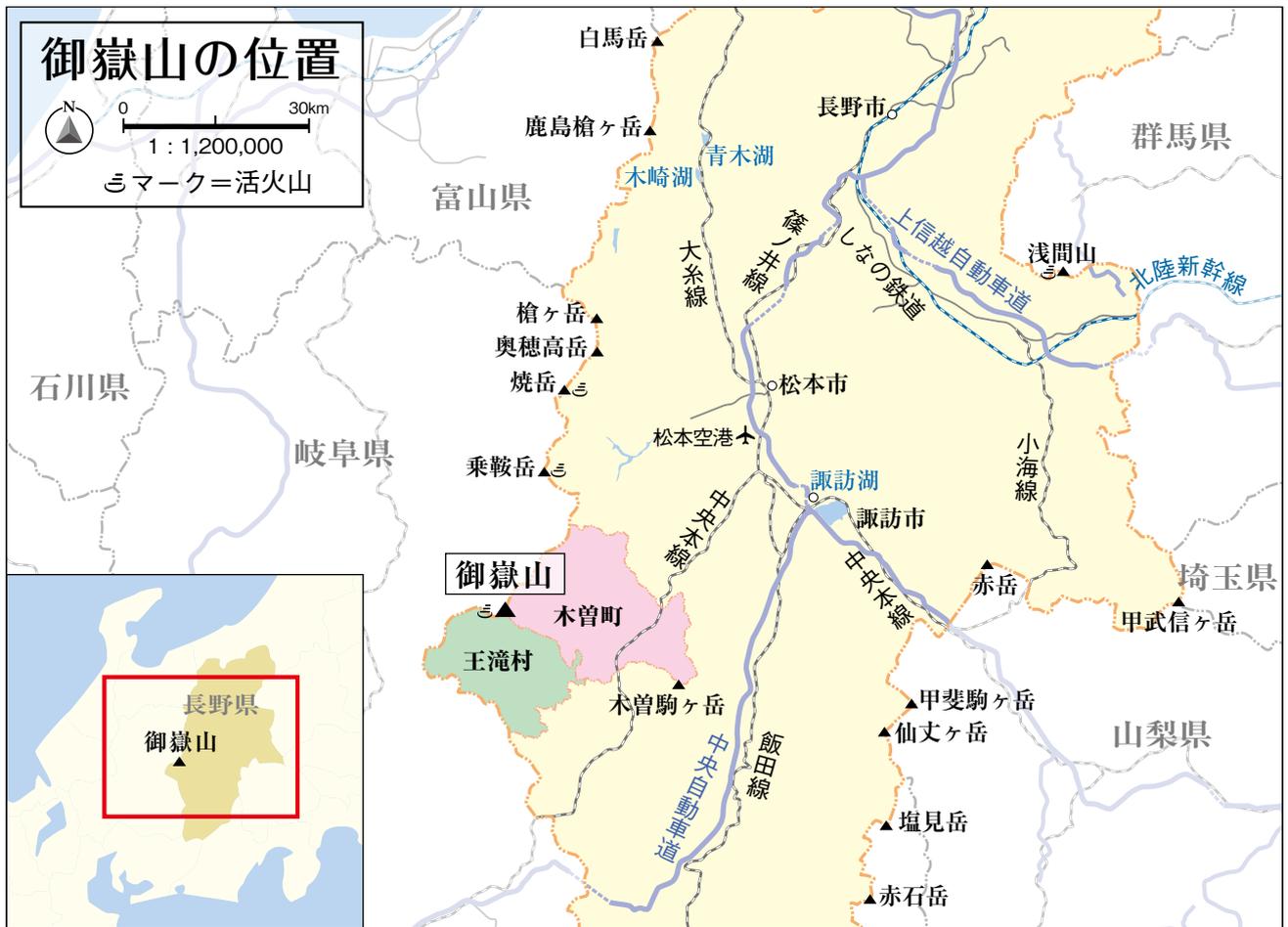
[第6章] 火山との共生をめざして

畏敬を集める信仰の山	194
追悼式の開催・慰霊碑の建立	196
立ち入り規制緩和の推移	197
登山者の安全対策	199
山小屋の再興・避難施設の整備	202
御嶽山火山マイスター制度	204
登山計画書届け出の県条例化	205
観光振興・復興に向けて	206
資料 御嶽山噴火災害発生以降の主な動き	208

[第7章] ご寄稿

ご遺族・現地で被災された方より	210
-----------------	-----

取材協力者・写真提供者一覧	212
---------------	-----





山小屋名、登山道、標高数値などは噴火当時のものです

編纂委員

阪本真由美（兵庫県立大学准教授）

笹本正治（長野県立歴史館館長）

関谷直也（東京大学准教授）

秦 康範（山梨大学准教授）

藤井敏嗣（山梨県富士山科学研究所所長）